

大山古墳の大きさが紹介される際に、比較対象とされる“秦の始皇帝陵”はよく知られています。高松塚古墳の講座の時に唐代墳墓の壁画が紹介され、その完成度やスケール感から、始皇帝陵以降にもそれを凌ぐ立派な(=大きい)陵墓を築かれているのではないかと漠然と思っていました。今回、秦滅亡後の前漢・後漢の皇帝陵を一堂に比較しながら聴くことで、改めて始皇帝陵の特異さを感じました。兵馬俑坑も四つあり、大きさや形には配置的な対称性がなく、埋葬されている俑の種類が機動的なことから、生前の始皇帝を守る軍団をそのまま模して、地下世界に旅立った始皇帝の生活を支えるために埋葬しているとお話でした。

『魏志倭人伝』に卑弥呼が洛陽に使者が送ったのが景初三年(239年)とありますが、その遥か460年も遡った紀元前221年に秦は中国全土を統一して、秦王政は初代皇帝として始皇帝を宣言しています。500年近くも続いた春秋戦国の戦乱が終息して平和がおとずれませんが、一般民衆にとっては必ずしも安息の日々ではなかったようです。始皇帝の死後、“陳勝・呉広の乱”が勃発し、この反乱を口火として次々と“秦の圧政・暴政に対する抵抗勢力”が出現して、ついに劉邦によってわずか15年で秦は滅亡してしまいます。小澤先生は“秦の圧政・暴政”について①万里の長城、②秦の宮殿(阿房宮)、③始皇帝陵の三つを民に強制したことと話されました。『史記』陳涉世家によると、‘陳勝は900人の集団を率いる班長で、兵役として守備の任務に就くために漁陽に向かっていた’と書かれています。しかし大雨が降って道路が通れなくなり、到着の期日に間に合わなくなってしまいます。期日に遅れれば、法律に従って全員斬首にされてしまうという状況で、陳勝と呉広は「今、逃亡しても殺されるし、反旗を翻しても殺される。同じ死ぬのであれば、国のために死ぬほうがいいのではないか」と反乱を蜂起します。不可抗力でも罰せられる秦の法律は、あまりにも厳格過ぎたようです。

大雨で計画が狂わせられることは往々にあることです。熱海の土石流でも人生を狂わせられた人が多くいますが、中国でも近年、氾濫被害が大型化しているようです。中国河南省では先月17日から記録的な大雨が続き、鄭州市では地下鉄にまで浸水して、車両の乗客が腰まで水に浸かる大災害が発生しました。中国中央テレビの映像では、救助された男性が「水は肩の高さまで来て、水の勢いも強くて流されてしまった人がいた。」と話していて死者も出たようです。地下の密閉空間に雨水が侵入し水位が上昇してくる状況は、想像もしたくない恐怖です。

また、世界有数の大河を誇る中国では、氾濫のスケールも桁外れです。長江の中・下流の数百kmが水浸しになり、都市の全てが見渡す限りの洋々たる大海になり、その浸水面積は琵琶湖を優に上回ったこともあります。さらに日本と違い河床勾配の緩い中国では、氾濫した水がなかなか引かず浸水期間が一ヶ月を越えることさえあるようです。陳勝らの行軍を遅れさせた大雨も、千年に一度の大雨だったのかも知れません。

『史記』始皇本記には、“始皇初即位，穿治鄜山，及并天下，天下徒送詣七十餘萬人(始皇が初め位に即いた時、陵をつくるため鄜山の麓に穴を掘り、天下をあわせるに及び、天下の徒罪の者七十余万人を労役し)”と書かれています。始皇帝陵を築くために鳥取県の全人口を上回る70余万人の人夫が投じられたわけです。8,000体



という俑の数も数ですが、その一体一体の姿勢や表情、服装や装備が異なり、気が遠くなるほど手間がかかっています。陵は秦王政が王位についたときから造営が開始され、40年近く続けられています。中華統一を成し遂げたことから、規模や内容が大幅にグレードアップしたのかも知れません。

兵馬俑坑は、1から4号坑まで発掘が進んでいます。1号坑からは歩兵隊が、2号坑は軍団の野営地が、3号坑は将校たちの司令部が納められていました。4号坑は空っぽで、秦国滅亡によって、未完成に終わったものと考えられています。秦王は、子孫が生きる地上世界のことを思いやらず、地下世界のことばかりに民衆を強制したために、秦の滅亡を早めてしまったのでしょう。